

昭和と彩った

日本の石油化学工業

題字は三井石油化学
相談役島井保治氏

あなどれない代用品

そのエンジンの周囲を見
回した学生達の目に映った
ものはラム田の倍以上も
ある大きな黒い茶色をした
円筒だった。その円筒は紫
色の煙の中で燃り続けてい
た。周囲にさつきからカン
リンの燃える臭いが立ち込
めていたが、その異常に大
きな円筒形の物体に吸い寄
せられるように学生達が集
まった。

それは合成ゴムだ

「それは奴が燃える燃料用
の増槽タンクで絶縁材と同
じように新しい材料で作ら
れてる。間違ひなく合成

ゴムだ。アメリカはもうエ
ンジンが無くてもゴムの代
用品を使わねばならぬとい
うこと来たと思える。しか
し、代用品といってもなが
ながぬれない性能があるこ
とも確かだ。」

当時としては回でも、軍
極秘、扱いの手の話を
技術将校が気軽に学生達に
したのは、多分この場の
高揚した雰囲気によるもの
のようだった。

その利根は何であるか

「その利根は何であるか
ますか。」
学生達に取り囲まれた技
術将校は暫く沈黙していた
が、言いつくそうに口を開

いた。

「大きな声では言えんが、
実はそのようなゴムで作ら
れたガソリン・タンクとい
くれば機械弾をぶち込んで
もなかなか火がつかない。焼
夷弾包のような機械弾は当
たれば火災を起すわけだ
が、この燃料タンクに当た
っても、ゴムだから火はす
く収縮して、空気の酸素
が入らないからなかなか火
災になりにくい。」

「油に強い合成ゴムとい

うてはゴムのようにな
るもので作られてると思え
ていいのでありますか。」
「はい、お前よく知っ
てるな。フナなどという
言葉を何処で聞いたんだ。」
「はい、ここに動員され

②

る前に学校で有機化学の合
成と重合という講義から、
ドイツで作った合成ゴムに
そいつものがあるの聞いた
なことがあります。」
「そうか、戦争は科学技
術を進歩させるというが、
いまの戦争はたしかに科学



日29のエンジン

戦だといつても出来る。
代用品を使っているなんて
いって敵を侮ってはいか
ん。」
その技術将校はいまも
昔、敵はついに生ゴムが
なくなると合成ゴムという
代用品を使わねばならぬ
なると言っていたことを忘れ

たように言い切った。

「わが国でも合成ゴムは
このように使われ方をして
いるのでありますか。」
別な学生が話の続きをせ
がむように聞いた。

「いや、わが国ではまた
そこまで考える必要はな
い。合成ゴムの使用はま
だほかに重要な要素が多
いから、その点を優先させ
ていようとしたのだ。そん
にお前達の目にも一部触れ
ているだろうが、エンジン
回りの電線などの被覆は油
や熱に強い合成ゴムが一部
使われているのだ。」

学生達は日頃、自分らが
扱っているエンジンのシリ
ンダー後部を取り巻いてい
る電線電線を思い出してみ
たが、当時の航空機用エン
ジンの電線は耐油性の合成
ゴムで被覆されていたのか
も知れないが、アルミ線で
纏った外装で保護されてい
たので学生達の頭にはピン
と来なかったようだった。

第二章

初めて手にしたPPE
この時期、日本でポリエ
チレンの生産が行われつつ
あるが、合成ゴムが実際
に使用されているといった
技術将校の説明は全く根拠
がないわけではなかった。
しかし、実際問題として合
成ゴムは多少実績があった
ものの、ポリエチレンに至
っては盲目、見当もついて
いなかったと聞いていたな
る。ただ、当時の戦局では
軍の関係者としてそのよう
な言い方しかできなかった
ことにはたしかである。

ポリエチレンの実物を自
本が初めて手にしたのは昭
和十七年五月である。当時
シンガポールを占領した山
下兵団の砲兵将校が陸軍第
五研究所に「戦利品の中に
電波兵器らしいものがある
り、調査された」といっ
た電報を密送した。陸軍はか
ねてから電波兵器の共同研
究をしていた日本電気生田
研究所長の小林正次に調査

を依頼。小林が現地に乗
り込んで調べた結果、イギリス軍
の対空砲撃用の電波
標定機であった。受信のた
めの空中線は東北帝大教授
八木秀次が戦前開発して世
界的な特許となった八木ア
ンテナを四組配し、電気機
械的操作で上下、左右に振
るようになっていた。この
八木アンテナが電波兵器の
主役を担っているなどとはそ
の頃の日本の軍や民間の電
気技術者は気がついていな
かった。また同じ頃、アメ
リカ軍のフィリピンにおけ
る最後の艦といわれたコレ
ビートル島が陥落し、そこ
でも日本機の乗襲に備えて
配備していた電波標定機が
捕獲され、いずれも東京・
国分寺の第五技術研究所に
送られた。そして、海軍も同
様にシンガポールでイギリ
ス製の電波兵器を幾つか捕
獲して自黒の海軍技術研究
所電波研究部に現物が送ら
れた。

(筆者は堀野操彦本社社長)

昭和と彩った

日本の石油化学工業

③

題字は三井石油化学
相談役尾島保治氏

PE開発を緊急指令

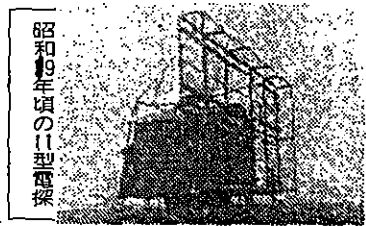
陸軍と海軍の仲の悪さは相当なものであったよう
で、お互いに同じものを手
にしながら全く別な組織
と方針で研究に当たった。
このため、能率の悪く、こ
この上なかつたことばなし
かである。

陸海軍ともに彼らの電波
兵器の技術水準の高さには
驚かされた。そのうち、両
者とも電波兵器に接続
している同軸ケーブルの中
心にある導体芯線の回りに
びっしり紙状の物質が詰め
られていることに関心を寄
せた。

炭化水素に二重結合を
けると生成する物質である
という特許を出している。そ
れを以前、外国の文献で読
んだことがある。分析の結果
果からも当該品ならん」と
いう報告を寄せた。そこで、
初めてこれがポリエチレン
というものであることが判
った。

この報告をもとに陸軍技
術研究所は政府特許庁の未
審査外国特許を風刺して購
置した結果、ようやく「C
I」のポリエチレンの製造に
関する特許申請を完了し
たという。この特許申請は
「C・O・O」から五割の
酸素を含むエチレンガスを
四〇〇度Cに熱し、三千気
圧で連続的に熱除去を行

なから反応させて重合物を
生成せしめる。その
「C・O・O」ともった。
陸軍も海軍もこの物質の
生産を緊急命令として関係研
究機関に開発要請した。
電波探知機(海軍は電波
探信機、陸軍は電波警戒機



昭和初年頃のII型電探

と電波探知機の二機種に分
けていた)は四軍が十二年
(一九三七年)から、そし
て海軍は十三年(一九三八
年)からそれぞれ研究開発
に着手していた
しかし十八年(一九四三
年)になつてもはなはかし
い研究成果は得られな

この電波探知機は後に「
ター」と一般に呼びならわ
されるわけだが、要は電波
による標的の発見と距離の
測定を行うために特に指向
性の強いアンテナを必要と
し、さらに高周波電流を發
射するための饋電線(きで
んせん)にはとくに高性能
な絶縁材が必要であった。
この饋電線はいわゆる鏡
管(がいそ)同軸ケーブル
で内部の中心に導体芯線
があり、その周囲を銅のパ
イプで囲むわけだが、この
芯線と銅パイプが接触を起
こすと電波を正確に飛ばす
ことが出来ない。そこで銅
のパイプと芯線との間を空
気で完全に絶縁するため芯
線から鏡管の銅パイプの内
壁に対して放射状に糸糸を
張り、それを二十枚おきに
吊るして銅パイプの真ん中
に芯線を固定していくとい
う、いまにして思えばまづ
に名人芸的な絶縁方法であ
った。

このようなことをやった
のは当時、古河電工の理化

研究所長をしていた佐久間
昇の発想であった。
陸軍技術研究所はこの同
軸ケーブルを最良のもの
として採用した。ただし、こ
れを実際に地上に施設する
と同軸ケーブルの上に乗る
走ったりして、パイプが震
れ、意味をなさなくなつた
り、曲げたりするや芯線と
鏡管が接触する。また、も
っと問題なのは空気が絶縁
の役割を果たしているのに
湿気を含むと絶縁性が極端
に低下してしまつた。

一方、海軍は古河電工や
日本窒素が試験的につくつ
たポリスチレンや塩化ビニ
ルの利用を意図したが満足
な結果は得られなかつた。
こつた欠陥を決定的に
解決したのは当時、ポリエ
チレンの生産に成功してい
たイギリスやアメリカであ
つた。彼らの同軸ケーブル
は導体芯線とパイプの間を
ポリエチレンで密封してし
まうことによつて湿気は勿
論、曲げても押し流しても
全く問題のないレーダー用

同軸ケーブルを開発してい
た。
「ラッタ」とは何だ
昭和十六年、太平洋戦争
が始まる直前に開かれた日
黒の海軍技術研究所での技
術関係最高顧問会議(議長
は電液物理研究会会長・長
岡半太郎博士で一海軍技
術将校が「最近、米英から
の電波関係技術の報告に
「ラッタ」といふ言葉が出
てくるが、これは何ですか」
と質問したのに対して長岡
博士らは理解出来ず、調査
を約束したといふ話が行わ
れている。もっとも、この
時、「ラッタ」と言わずにレ
ーダーと言つていればある
いはわかつたのではないか
という向きもある。レーダ
ーはレイデオ・ディテク
ティング・ユニット・レーン
ジングの略であり、これが
正確に使われていなかった
のはあまりにもお粗末な話
であつた。

筆者は梅野操(本社主幹)

陸軍

昭和と彩った

日本の石油化学工業

④

題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

抜群の電気的特性

海軍は連合軍から捕獲した電波兵器の同軸ケーブルに仕込まれた弾状のポリエチレンを航空技術廠でテストした結果、化学薬品に対して非常に安定していると同時に電気的特性が抜群であり、中でも高周波絶縁性がとくに優れていることが判った。そこで海軍は電気通信試験所を始め、大阪帝国大学の谷久也・梶吉西研究室や京都帝国大学児玉信次郎研究室にこの物質の緊急研究開発を委託した。

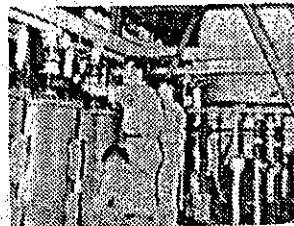
電氣試験所ではまたまた高圧反応を専門としていた久米泰三主任研究員が野口研究所に引き抜かれたので、野口研究所に任せきで進めたという。野口研究所は日本窒素グループを創設した野口謙が主宰したものであり、当然、日本窒素が協力をした。

100%のPEを生産

野口研究所は日本窒素の水俣で十九年一月にパイロントプラントを建設。千八百九十気圧、二二〇度C、ワンパス三五%の収率ではあったが、一バッチで百%のポリエチレンを得たとし

ている。ついで、呉海軍工廠から内径二百mm、外径八百mm、長さ五百mmの重量六トンの砲身を譲受け、モノニア合成塔の修理用旋盤で高圧反応器を製作。いよいよ本格的な生産開始を見込んだが、二十年五月、米軍の空襲で完全に破壊されそのまま終戦を迎えた。

一方、京都帝大本部研究所では鋼塊をくり抜いて四十リットルの反応器を製作、千気圧のコンプレッサを使用したが、異常反応が発生し、反応器の蓋を開けていた炭素鋼のボルトが伸びて爆発に至らず、命拾いしたこともあったという。結局、十九年三月までに六・三%のポリエチレンの生産を確認した。そしてさらに日産二十t



京大本部研究所

離、抽出して使用した。

結局、終戦まで日本では工業的に高圧法ポリエチレンの製造が出来なかったわけだが、この高圧法ポリエチレンを作ることが出来なかった結果、日本の本土防空戦はかなりのダメージとなった。勿論、原因は真空

の連続式生産設備の建設について準備を進めている間に終戦となってしまった。阪大は三井化学の三池工業所と同じように研究開発に取り組んだが、結果は前二社と大きく変わるどころはなかったという。また原料エチレンの確保については各社ともエチルアルコールを脱水し、エチレンを分

質の性能不良とか、発電機の出立不足とか、理田は深山あつたことは明白だが、やはりレーダーの性能を向上させる高周波絶縁材が無かったことは痛手であった。

1を搭載したのは昭和二十年春になってからであった。海軍は東芝製のFDRキ二号といった。波長は東芝が六十センチ、住友のそれは八十センチでも重量は百二十kg、有効探知能力は値が二百から三百mでしかなかった。しかも、操作が難しく、余程敵に接近しないと感応しないといった劣悪なもので殆ど無用の長物化していた。このため、操縦士の中にはこのレーダー機材を下ろしてその重量分だけ弾薬や燃料を積みようとする者もいた。

日本を空襲したB二九は延べ三万三千四十一機。うち撃墜されたもの四百八十五機。損傷したのも二千七百七機。投下した爆弾と焼夷弾の総量は十四万七千t。失った搭乗員三千四十一名だったと戦後、アメリカは公表した。日本も内務省が降伏文書調印の日に関会に被害状況の報告を行った。それによると死者二十四万一千三百九名、負傷者三十一万三千四十一名、家屋の全壊全壊二百三十三万三千三百八十八戸、同半焼半壊十二万九百三十八戸、罹災者八百三十一万三千四十一名に上ったという。

その意味で、ポリエチレンの生産をもっとも待望したのは電波兵器研究者であったのは当然だが、それ以上日本本土の防空任務についていた陸海軍戦術機の操縦士にとって切実な問題であった。

彼らは昼間、真来するB二九に対しては目視飛行で立ち向かったが、夜間の空襲に対してはその目となる遊撃用の電波探知機がないため、というよりも性能的に全く信頼性がなかった。ほとんど敵を認識できず、やみくもに暗い夜空を飛び回り、B二九の機翼で焼かれる街の炎火を見下ろしては、機上で切歯扼腕するばかりであった。

日本を空襲したB二九は延べ三万三千四十一機。うち撃墜されたもの四百八十五機。損傷したのも二千七百七機。投下した爆弾と焼夷弾の総量は十四万七千t。失った搭乗員三千四十一名だったと戦後、アメリカは公表した。日本も内務省が降伏文書調印の日に関会に被害状況の報告を行った。それによると死者二十四万一千三百九名、負傷者三十一万三千四十一名、家屋の全壊全壊二百三十三万三千三百八十八戸、同半焼半壊十二万九百三十八戸、罹災者八百三十一万三千四十一名に上ったという。

二九に対しては目視飛行で立ち向かったが、夜間の空襲に対してはその目となる遊撃用の電波探知機がないため、というよりも性能的に全く信頼性がなかった。ほとんど敵を認識できず、やみくもに暗い夜空を飛び回り、B二九の機翼で焼かれる街の炎火を見下ろしては、機上で切歯扼腕するばかりであった。

1を搭載したのは昭和二十年春になってからであった。海軍は東芝製のFDRキ二号といった。波長は東芝が六十センチ、住友のそれは八十センチでも重量は百二十kg、有効探知能力は値が二百から三百mでしかなかった。しかも、操作が難しく、余程敵に接近しないと感応しないといった劣悪なもので殆ど無用の長物化していた。このため、操縦士の中にはこのレーダー機材を下ろしてその重量分だけ弾薬や燃料を積みようとする者もいた。

日本を空襲したB二九は延べ三万三千四十一機。うち撃墜されたもの四百八十五機。損傷したのも二千七百七機。投下した爆弾と焼夷弾の総量は十四万七千t。失った搭乗員三千四十一名だったと戦後、アメリカは公表した。日本も内務省が降伏文書調印の日に関会に被害状況の報告を行った。それによると死者二十四万一千三百九名、負傷者三十一万三千四十一名、家屋の全壊全壊二百三十三万三千三百八十八戸、同半焼半壊十二万九百三十八戸、罹災者八百三十一万三千四十一名に上ったという。

の誤りでした。訂正します。

（筆者は梅野操本紙主幹）
〔訂正〕前回の写真説明で昭和29年頃の11型電探とあるのは「昭和19年頃」の誤りでした。訂正します。

昭和と彩った

日本の石油化学工業

国産化の道求めて

第三章

合成ゴムについても大体同じような状況ではあったが、それでも合成ゴムに対する日本の知見は高圧法ポリエチレンとは比較にならないほど進んでいたことは事実であり、工業的な生産実績も上がっていた。

古電、チオコール獲得

日本が合成ゴムに関心を持ったのはドイツでブナーSとか、ブナーNといった合成ゴムが發明され、アメリカではクロロレンが開發されたという昭和五年(一九三〇)から六年(一九三二)にかけてであり、三井、三菱、住友、窒素、昭和など化学事業を営んで

⑤
題字は三井石油化学
相談役黒居保治氏

月、政府は企画庁と資源局を統合して企画院とし、日本、朝鮮そして満州における産業体制の拡充に乗り出した。その翌十三年(一九三三)、鉄鋼、石油、化学、造船など二五の産業に対して、拡充四年計画が策定されたが、この中でゴム、棉花、加里肥料の三品目は期間内に目標達成は困難として除外された。

除外品目にゴムが入ったという事はすでに政府の中で別途対策を必要とするという考え方が強かったことを示している。事実、この年の七月、政府は「ゴムの使用規制に関する規則」を公布した。これは日本を取り巻く国際情勢からみて天然ゴムの輸入が途絶する恐れがあることを察知していたからにはかならない。

同年、商工省は「合成ゴム工業確立十年計画」を打ち出した。この年の日本のゴムの需要は約六万トンであった。そこで政府は当面、国内需要に見合う国産化計画を考え、日本学術振興会に諮問した。田中芳雄博士を委員長とする合成ゴム小委員会はブタジエン系とク

エノモノホロロの扱い、このため、アメリカからドイツから技術を導入するしかないという見方が強まり、住友化学はブタジエンに当たった。ところが技術の質問に答へてくれるところがケンモホロロに扱われ、技術を譲うなどということが到底出来なことが判ったという。そこで今度はデュポンと交渉することになり、一時は有望という見方もあったが、支那問題

に動きかけたが、生返事が続いているうちに交渉は打ち切られた。このため日本は自身で合成ゴムの國産化を果たさねばならない状況となった。当時の日本で合成ゴムの研究開発に需要家の立場から熱心に取り組んだのは日本タイヤ(現ブリヂストン)であった。同社の社長石橋正二郎は早くから合成ゴムに関心を示していた。

昭和七年(一九三二)以来クローロレン研究に着手していた三菱鉱業の光永政介は日本タイヤの顧問で昭和十一年、日本タイヤに移転して率先して合成ゴムの研究開発を推進していた。日本化成における合成ゴムの國産化は非常にスムーズにいった。というのも大工試で殆どノウハウが確立されていたからでもあるが、同社が大量の技術者と資金をこの工業化に当てたことも大いに与かって力であった。



梅野研究所

クロロレン系ゴム、さらにその他合成ゴムに関して内外の文献を収集すると同時に國産化の道求めて研究報告書まとめることに努力した。

この頃になると国内の企業の中から合成ゴムを自社技術で企業化する動きが出はじめたが、アメリカ・デ

トリックを通じてデュポン

の設立に協力し、アクリロニトリル・ブタジエン系合成ゴム月産一・二五トンの設備を建設したが、試運転中に終戦を迎えた。同社の戦争全期間における合成ゴムの生産量は約十五トであった。

(筆者は梅野棟彦(本紙主筆)

昭和と彩った

日本の石油化学工業

こぞつて自社開発へ

◎
題字は三井石油化学
相談役 尾層保治氏

日本化成の最初の設備は、並んで、太平洋戦争の末期昭和十七年（一九四二）春、問を通じて合成ゴムの最大に稼働。生産能力はフナ一Nで日産一トであった。同社は当初フナ一Sも生産する予定であったが、軍が耐油性を緊急物資としたため、フナ一Nに集中して生産することになったといふ。しかし、アクリロニトリルの生産が思うにまかせず、この一トの生産能力がフルに稼働するに十分ななかった。それでも終戦までに同社は約百二十四トの生産を上げた。

三井、16年に3ト生産
この三要素の日本化成と

危険性から逃れることが出来ず、研究はいき詰まっていた。そこで、フタジエン系の合成ゴムに目標を転換し、原料フタジエンをカール・バイドから生産することになり、昭和十五年（一九四〇）三池、電化共同で大牟田に中間試験設備を建設した。

翌年、三井鉱山は三池染料工業所を中心とする化学部門を三井化学として独立せしめたため、合成ゴムの企業化は三井化学に移った。とくに同社は研究の着手が三要素よりも早かったこともあって日本化成が昭和十八年から生産を開始したのに対し、昭和十六年には早くも三トの生産を上げ、終戦までに約百三十八



三池染料工業所

トの実績を上げた。さらに住友化学も合成ゴムの固着化については大きな努力を払った。しかし、同社は合成ゴムの事業化に対する着想は早かったが、よくいえば合理的、悪くい

た。住友化学が合成ゴムの固着化に後れたのは同系企業であった住友電工の原料調整が当初、シロロフレンの固着化を目標として準備を進めていたところ、途中

の要請が強まって、もととも研究を再開した。軍の要求が耐油性ゴムであったことからフナ一Nに集中することにして朝鮮の興南に日産百トのバイロットプラントを建設、十五年

に日産百トのバイロットプラントを建設、十五年（一九四〇）の暮れから生産を開始した。しかし、軍の増産要請が激しく、日産百ト工業を設立して岡山に日産一トのフナ一Nの生産設備を十八年（一九四三）から建設にか

京都市大の研究設備を利用したのは、当時、古川研一（一九四三）から建設にかかり、十九年（一九四四）に完成させた。ところが、電力不足や機材が間に合わなかったという関係と軍が急げとせかしたこともあって、止むなくとった処置だ

はアルドール法フタジエンの製造については非常に高い水準にあったといわれながら、生産が不調に終わったのは当時、ホイラーが調達出来ず、蒸気機関車から蒸気を引っ張ったり、内地

から取り寄せようとした区画（筆者は柳野棟彦本紙主筆）

えは理論ばかりが先行するきらいがあった。この結果、開発は周囲の状況に大きく左右された。結局、昭和十八年（一九四三）になって大阪高槻市にあった京都府大化学研究所の中間試験設備を新居浜に移設、その年約三トのフナ一Nを生産。終戦までに早くも十八トの実績を記録し

（筆者は柳野棟彦本紙主筆）

（筆者は柳野棟彦本紙主筆）

（筆者は柳野棟彦本紙主筆）

昭和と彩った

日本の石油化学工業

◎
題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

拒まれた技術供与

日本に送り着いたドイツ潜水艦は十八年(一九四三)五月十日にビスケー湾のロリアン基地を出航し、イギリス海軍の哨戒の目をかすめ、アフリカの喜望峯を回り、インド洋を横断し、マレー半島の日本海軍の前進基地ペナンに寄港した。ただ、米軍潜水艦が出没する南支那海を横切り、米軍機の跳梁するボルネオ海を突っ切って全航程約一万六千マ、九十日を無事乗り切った。

日本海軍はドイツ潜水艦の運動性能が日本の潜水艦よりもかなり軽快であり、ソナー(音波探信器)や逆探知器、水中無線の性能が日本では想像し得なかつたほど優れた性能を備えてい

ることに目を覚めた。フナーンの脅か

そして機関室でエンジン・ペッド一杯に耐油性ゴムが防振、防音用材として敷きつめてあるのに一驚させられたという。エンジン・ルームは大量の油が付着するためフナーンのような耐油性の合成ゴムでなければ

もたないといつわけである。アメリカやイギリスの艦船のソナー精度が非常に高くなっている時期でもあり、潜水艦から出る音は極力小さくしなければならなかつた。とくに十八年(一九四三)に入ってから日本は潜水艦が数多く撃沈されていたので、この防音、防振対策は緊急課題であつた。

この結果、日本海軍は一年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場で本格的に合成ゴム・フナーン、フナーンなどを生産していた。それにもかかわらずドイツはこ



F・ハーバー博士

しかも、日本の潜水艦に搭載したドイツ潜水艦長シユネーウイント大尉から「貴国の潜水艦は音がうる

さ過ぎである。これでは簡単に見つかりてしまふのではな

な。住友化学や日本化成がドイツのイギー・ファルベ

な。三国防共協定を締結するほどの仲でありながら、日本が要請した合成ゴムの技術

の技術情報を求めたのは十二年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場

の技術情報を求めたのは十二年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場

わらの生産技術はまた経済的なものではなく、試験的なものだと説明していた。しかも、この時すでにイギーはアメリカのスタンタードオイル、オプ・ニューシャージャー社に対して合成

の技術情報を求めたのは十二年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場

の技術情報を求めたのは十二年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場

ードに譲る代わりにスタンダードの株式二割をイギーが保有する秘密契約に調印した。では、同盟国日本に対してはどのような判断であつたのか、といつていかなる

の技術情報を求めたのは十二年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場

の技術情報を求めたのは十二年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場

して世界の化学技術関係者を驚嘆させたドイツのフリツ・ハーバー博士が六年(一九三二)に、日本の学会の招きに応じて来日した

の技術情報を求めたのは十二年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場

の技術情報を求めたのは十二年(一九三三)から十三年(一九三三)である。当時、イギーではレバークーゼン工場

(筆者は柳野棟彦本紙主幹)

昭和と彩った

日本の石油化学工業

三井石油化学 相談役 尾居保治氏

復興への息吹

▼第四章

戦争で徹底的に破壊された国土は無惨であった。そしてそれ以上に人の心は荒廃していた。町という街に浮浪者が溢れ返り、荒唐な暴力とあらゆる悪がはびこっていた。食料難や物資の不足で、インフレーションが過度に進行しはじめ、もはや政治も打つ手を失っているかに見えた。

戦前は街行く人の心をそこはかとなく浮き立たせた銀座通りは見ると、柳の木も殆どが立ち枯れの状態であった。そして新宿や渋谷、新橋といった省線

電車(当時は運輸省管轄であったため)のように呼ばれていたの駅前にはすべて闇市が立ち並んでいた。発布された新憲法

そうした中で日本を占領した連合軍の最高司令官であるマッカーサー元帥は日本の国家改造を旨として矢張り早くGHQ(連合軍総司令部)指令を発した。

GHQによる占領政策に関する指令は昭和二十年(一九四五)九月、東京湾上に浮かんだアメリカの戦艦ミズリー号上で日本が降伏文書に調印した翌月から

日本政府を通じて国民の各階層に伝わった。中でも財閥解体、労働運動の自由化、農地改革は日本経済の体制を根本から揺るがすものであった。越えて二十一年(一九四六)には公職追放令が発動され、戦前から戦時にかけて政界、官界、財界で指導的立場にあった人はもちろん、旧陸海軍関係者、治安維持関係者、さらに教育関係者まで含めて全国で約二十八万人の人がその地位や職場を追われる結果となった。

二十二年(一九四七)に入ると私的独占禁止法といついままで聞き慣れない法律がGHQの指導で施行された。そして日本経済繁栄

の基礎となったといえるが、いまなお論争が絶えない「戦争放棄」を謳った新憲法が与えられたGHQの指導のもとに発布された。

この年は日本経済がもっとも疲弊していた時期であった。しかもGHQはこの状況に追い打ちを掛けるよ

日本政府を通じて国民の各階層に伝わった。中でも財閥解体、労働運動の自由化、農地改革は日本経済の体制を根本から揺るがすものであった。越えて二十一年(一九四六)には公職追放令が発動され、戦前から戦時にかけて政界、官界、財界で指導的立場にあった人はもちろん、旧陸海軍関係者、治安維持関係者、さらに教育関係者まで含めて全国で約二十八万人の人がその地位や職場を追われる結果となった。

二十二年(一九四七)に入ると私的独占禁止法といついままで聞き慣れない法律がGHQの指導で施行された。そして日本経済繁栄

の基礎となったといえるが、いまなお論争が絶えない「戦争放棄」を謳った新憲法が与えられたGHQの指導のもとに発布された。

この年は日本経済がもっとも疲弊していた時期であった。しかもGHQはこの状況に追い打ちを掛けるよ

戦後初のメーデー 終戦から一、二年は人々は何処へいつても、誰と会っても食べるどころか話題にできなかった。この頃、有名な歌舞伎役者の一家がその弟子に殺された。歌舞伎役者が弟子にうぐに食事を与えなかったのが直接の助機だったといふ。食いの恨みの恐ろしさを改めて教えるような事件であった。

竹の子生活という表現が流行したのもこの頃である。人々は食糧不足の恐怖に包まれて、米や野菜の買い出しに明け暮れる毎日を送っていた。

五月、戦後初めての労働者の祭典、即ちメーデーが開催された。メーデーは昭和十一年(一九三六)の第十六回以来、開かれていなかった。この戦後の第一回メーデーは折りからの社会情勢を反映して「食料メーデー」と呼ばれた。

このメーデーから二十日ほど後に労働戦線統一世話人会が主催した「飯米獲得人民大会」のデモ行進の中にひととき自立プラカードにひととき自立プラカードには「詔書、国体はゴジク」などと書かれた。飯はタラフク食、死ね、キョメキョシ、と書かれていた。

宮内省はこれを遺憾として検事局に告発を要望したことからその後、二年間にわたって不敬罪の適用をめぐって政府とGHQが対立するようになった。このプラカードは日本共産党田中精一が、機細胞所長の松島松太郎が作ったもので「天皇制を風刺したもの」(筆者は梅野棟彦本紙主幹)

刺したものに過ぎない」と主張した。最終的にはこれについて相談を受けたGHQ民生局長ホイツトニー准将が「不敬罪は個人の崇拜を禁ずるに過ぎない」として日本政府の松島起訴を斥ける意向を表明した。

このような食料難の騒ぎが続いていた頃、日本国民はいままでみたこともない、ふっくらとした大きな食パンの配給を目を丸くした。中には感激に涙を流した人もいたと当時の新聞は伝えている。この白米に等しい食パンの配給は日本国民の食料事情のあまりの酷さにGHQが民生安定のため、占領軍物資の中から小麦粉を放出して配給したものであった。たしかに当時の食料不足は深刻で主食の配給は止まったままであった。それは東京の十九日といつのはまだいい方で、北海道では七十四日にもなっていた。

このメーデーから二十日ほど後に労働戦線統一世話人会が主催した「飯米獲得人民大会」のデモ行進の中にひととき自立プラカードにひととき自立プラカードには「詔書、国体はゴジク」などと書かれた。飯はタラフク食、死ね、キョメキョシ、と書かれていた。

宮内省はこれを遺憾として検事局に告発を要望したことからその後、二年間にわたって不敬罪の適用をめぐって政府とGHQが対立するようになった。このプラカードは日本共産党田中精一が、機細胞所長の松島松太郎が作ったもので「天皇制を風刺したもの」(筆者は梅野棟彦本紙主幹)

「詔書、国体はゴジク」

論議呼んだプラカード

戦後初のメーデー

このメーデーから二十日ほど後に労働戦線統一世話人会が主催した「飯米獲得人民大会」のデモ行進の中にひととき自立プラカードにひととき自立プラカードには「詔書、国体はゴジク」などと書かれた。飯はタラフク食、死ね、キョメキョシ、と書かれていた。

宮内省はこれを遺憾として検事局に告発を要望したことからその後、二年間にわたって不敬罪の適用をめぐって政府とGHQが対立するようになった。このプラカードは日本共産党田中精一が、機細胞所長の松島松太郎が作ったもので「天皇制を風刺したもの」(筆者は梅野棟彦本紙主幹)

刺したものに過ぎない」と主張した。最終的にはこれについて相談を受けたGHQ民生局長ホイツトニー准将が「不敬罪は個人の崇拜を禁ずるに過ぎない」として日本政府の松島起訴を斥ける意向を表明した。

このメーデーから二十日ほど後に労働戦線統一世話人会が主催した「飯米獲得人民大会」のデモ行進の中にひととき自立プラカードにひととき自立プラカードには「詔書、国体はゴジク」などと書かれた。飯はタラフク食、死ね、キョメキョシ、と書かれていた。

昭和と彩った

日本の石油化学工業

題字は三井石油化学
相談役 尾居保治氏

瀬戸際の日本経済

その間にもインフレは容
赦なく進み、二十一年の國
家予算は七百七十六億円の
赤字となり、これはその年
の予算の実に四〇%近いも
のであった。しかも、鉱工
業の生産水準は戦前(十年
から十二年)を二〇〇とし
てその三〇%にしか達して
いなかった。その上、重化
学工業の殆どが政府からの
補助金なしにはやっていけ
ないという状態であ
り、これらがインフレを加
速する役割を担っていたと

いってよい。
初の「宝くじ」発売
国民の間にはいろいろも
ない明日への不安が渦巻い
いた中で政府はせめて何か
明るい材料を、この年の
十月二十九日第一回の宝
くじを発売した。一枚十
円で二等賞金は十万円。副
賞は純綿のキヤラコ二反で
あった。

評判になったのは宝くじ
の外れ券四枚で金鶏という
煙草十本の引換えが行われ
たのである。いまという
末等である。その頃煙草は
一日三本しか配給されてい
なかつたから愛煙家はこれ
を自当りに宝くじ売場に並
んだものであった。
こうした街の風景とほう
らほらに時期を同じく政府
界の一部に「三月危機」説
が流れ出した。

要するにこのまゝいけば
日本経済は間違いなく破産
するところなのである。この
危機説に対する関心は次第
に膨れ上がり、野党はもち
ろみ、労働組合や知識人の
間でも政府の責任を追及す
る声がかかるようになってい
った。



増産される硫安

増産される硫安
これ以上はさうにもならな
くなるという観測が支配的
になりつつあった。このた
め、全国の工場事業者の間
に一片に不安感が広がった
ことは当然の成り行きであ
った。

この結果、問題の解決に
官、民上げて取り組むとい
う非常事態宣言にも似た体
制が取られ、そうして生ま
れてきたのが戦後経済の一
時期を画した「傾斜生産」
である。
乗り切った。3月危機

この政策の発案者はその
ころ、経済安定本部にいて
若きセオリストと言われた
大来佐武郎で、それを外務
省調査局特別調査委員会に
嘱していた東大教授であつ
た有沢広巳が政策として仕
立てあげたといわれてい
る。
石炭や鉄鋼の生産を拡充
するための資金供給につい
て政府は責任を果たすた
め、二十二年(一九四七)
一月、復興金融金庫を創設
した。
この金庫の創設はたしか
(筆者は梶野棟彦本紙主幹)

当時の商工省が二十一年
秋に国民経済研究協会に委
託した調査では「原材料の
在庫が減少し、それととも
に生産は低下を余儀なくさ
れる。原材料の在庫が底を
つくともみられるのは二十
二年(一九四七)三月から八
月の間」というものであ
る。

に重化学工業の復興を著し
く加速したが、他面では必
要とする資金を占領軍が放
出する食料、衣料、医薬品
などを処分して得た資金、
すなわち「見返り資金」だ
けに頼るとは出来ないの
で復金が発行する復金債を
すべて日本銀行が引き受け
たため、紙幣の大増発を招
き、インフレをも加速して
国民の大きな不満の原因と
なった。

このように思い切った政
策の推進によってひとまず
「三月危機」は治まり、食
料増産に必要な化学肥料の
生産も大幅に増加した。
統計上では、二十三年
(一九四八)の全国十八工
場における硫安生産は九十
一万五千トンを記録した。こ
れは戦前の生産が六五%ま
で回復したことを示してい
た。

に重化学工業の復興を著し
く加速したが、他面では必
要とする資金を占領軍が放
出する食料、衣料、医薬品
などを処分して得た資金、
すなわち「見返り資金」だ
けに頼るとは出来ないの
で復金が発行する復金債を
すべて日本銀行が引き受け
たため、紙幣の大増発を招
き、インフレをも加速して
国民の大きな不満の原因と
なった。